2014 年度夏期

フィールド・トリップ報告書

2014 年 10 月 30 日

慶應義塾大学法学部政治学科
塩原良和研究会

指導教授：塩原良和（法学部教授）
shiobarayoshikazu@hotmail.com

１．フィールド・トリップの概要

1.1　企画目的

今回の企画は、当研究会の多文化共生というテーマにもとづき、多文化共生政策が発展している浜松市にて、日系ブラジル人の方々との交流を通して、より実践的に多文化共生への理解を深めることを目的としたものである。

1.2　全体スケジュール

日程	概要	会場
8　月　27　日（水）	・サッカーを通した交流 ・ゼミ生間での交流	・細江総合グラウンド ・リステル浜中湖　会議室
8 月 28 日(木)	・宮城さんたちとの街歩き ・ブラジル料理屋での交流会 ・ホテルでの交流会	・浜松市、磐田市 ・ブラジルレストラン chaupana ・リステル浜中湖　会議室
8 月 29 日(金)	・宮城さんたちからのヒアリング ・宮城さんたちとのディスカッション ・多文化共生センターの松岡さんの講演	・浜松多文化共生センター

1.3　各日程ごとのスケジュール　。

＜１日目＞

タイムスケジュール	所要時間	内容
09:00	4:15	ホテルリステル浜中湖への移動
13:15	0:45	当日のタイムライン説明、サッカーの準備
14:00	0:30	細江総合グラウンドへの移動
14:30	0:20	グラウンドの準備
14:50	0:10	宮城さんたちとのあいさつ
15:00	1:40	サッカーを通した交流
16:40	0:20	撤収作業
17:00	0:10	別れのあいさつと翌日のコンテンツの説明
17:10	0:30	ホテルリステル浜中湖への移動
17:40	1:40	入浴、自由時間
19:30	0:60	食事
21:00	2:00	ゼミ生の交流会

＜２日目＞

タイムスケジュール	所要時間	内容
09:30	0:20	集合、当日の流れの説明
09:50	0:40	自由時間
10:30	0:40	浜松市への移動
11:10	0:20	宮城さんの送迎（岩田・根本)、移動
11:30	0:10	宮城さんたちとのあいさつ
11:40	3:20	各班ごとで街歩き
15:00	2:00	静岡芸術大学にてディスカッション
17:00	0:30	バスへの移動
17:30	0:30	レストランへの移動
18:00	1:30	ブラジル料理屋での交流会
19:30	0:30	ホテルリステル浜中湖への移動
20:00	0:60	入浴、自由時間
21:00	0:30	宮城さんたちからのヒアリング
21:30	1:30	宮城さんたちとの交流会

＜３日目＞

タイムスケジュール	所要時間	内容
9:30	0:10	当日のタイムライン説明
09:40	0:30	多文化共生センターへの移動
10:10	0:20	会場設営
10:30	0:30	宮城さんたちからのヒアリング
11:00	0:60	宮城さんたちとのディスカッション
12:00	0:10	別れのあいさつ
12:10	0:50	昼食
13:00	2:00	松岡さんの講演
15:00	4:30	三田キャンパスへの移動
19:30		解散

（文責：フィールドトリップ・コーディネータ）

２．「フィールドトリップで考えたこと」（参加学生からのコメント）

※１人 20～30 行程度を目安（上限なし）で記入してください。
　前の人が書いた文章の下に、数行空けて書き足していってください。

＜3 年田上直弥＞
　今回のフィールドトリップを通じて、多文化共生を行っていく上で何が必要であるか再度考えるきっかけとなった。そして多文化共生を行っていく上で 2 つの軸が重要なのではないかということに気づいた。以下の区分はあくまで自分が考えたことであるが、1 つ目の軸は「形式的解釈―実質的理解」という軸、もう一つは「在住外国人への支援―“日本人”側の意識改革」という軸である。
　1 つ目の軸である「形式的解釈と実質的理解」というものは 3 日目の名前とその人物の説明を見て国籍や言葉、血統などを書いていくワークの時に感じたことであり、他者に対して国に基づいた区分を行う際に人がどのように考えるかについてである。例えば「形式的解釈」というのは法律で定められる区分であり、「国籍」という分け方がその最たる例であると言える。実質的理解というものは本人の考えに基づいた自分のアイデンティティの捉え方である。私はここで安直に形式的解釈は不必要性だと主張したいわけではない。制度による安易な区分によって得られる恩恵は少なくとも存在すると考えられる。重要なのはそのような形式的な観点とは別に個々人が日常的な生活を送っていく中で実質的理解、つまり相手を慮った上で行動できるかどうかであり、日常的にこの実質的理解ができる環境づくりが必要であると考えられる。　2 つ目の軸である「在住外国人への支援－“日本人”の意識改革」という点において、まず前者の
　「在住外国人への支援」については浜松国際交流協会(HICE)が実際に行っている活動などであり、多文化共生を行っていく上で欠かせない事柄である。また宮城さんたちがキーワードとして何度か仰っていた「ロールモデル」を作っていくことも重要になってくるだろう。一方“日本人”(ここでいう“日本人”というのはステレオタイプ的な考えを持った人々のことである)の意識改革についてだが、これについては、はままつグローバルフェア 「若者企画」の映像の途中で流れた「外国人だから無理」「国へ帰れ」などといった心無い言葉を見れば、言われたその人を傷つけていることは明らかであり、個人の自律を妨げるようなこのような行為を防ぐためにも“日本人”の意識改革は必要不可欠だろう。これら 2 つは片方だけを推進していけばいいわけではなく、両方を進めていくことで初めて本当の多文化共生をしていくことができると考えられる。
　上ではあえて 1 つ目の軸「形式的解釈―実質的理解」を“日本人”による解釈、理解にのみ限定しなかった。というのも合宿 3 日目の午前中の生徒同士の話し合いの中で、私は”私”でいいのだという自分自身のアイデンティティにたして国籍等に捉われない実質的な理解をしている声を伺ったからである。実質的理解は他者を理解する時だけではなく、自分自身を理解する際にも大切になってくる概念であろう。

以上 2 点について私が特にこのフィールドトリップを通じて考えたことであり、今後自分が多文化共生を考えていく上で非常に重要な企画であったと感じている。この場を借りてお礼を申し上げたい。

〈4 年 伊吹 唯〉

今回のフィールドトリップでは、今まで文献を通してしか見ることができていなかった多文化共生を肌で感じることができたと思う。その中で、今まで自分が「多文化共生」というものを難しく考え過ぎていたのではないかと感じた。

そのことを一番感じたのは、3 日目に町歩きの振り返りのグループディスカッションをした時である。静岡の学生の方々からは、「虹」や "colour"のような、カジュアルで明るいイメージの言葉が多文化共生のキーワードとして聞かれた。一方で、ゼミ生からは、「アイデンティティ」や「違和感」など、前者に比べると難しく聞こえるキーワードが上がった。これは自分のグループだけではなかったようで、他のグループでも同じようなことがあったと聞いた。

それは、静岡の学生の方々が当事者であるということも関係しているのかもしれないが、彼らが多文化共生を推し進めている浜松市で暮らしてきたこととも関係しているように感じた。私が「多文化共生」を知る手段は、ほぼ文献を通してしかない。文献を読むと、理論や問題とその解決策などが難しい言葉と表現で、何百ページにも渡り書いてあり、思わず本を閉じたくなる。しかし、自分が浜松市に暮らしていたとしたら、多文化共生を身を以て経験することができるだろうと想像ができる。そこでは、論理的な理論は見つけることはできないかもしれないが、文献で難しい理論を読むよりも、多文化共生が身近で、それほど難しくないものに感じられるだろうし、実際、今回の短い滞在期間の中だけでもそのように感じられた。

もちろん、理論も大切だし、多文化共生には難しい問題が多くある。教育、労働、言語、在留資格など問題はいくつでも挙げられるだろう。しかし、社会の全員が多文化共生の当事者となり、全員で多文化共生社会を作って行く時に、全員が多文化共生の問題のエキスパートである必要はなく、むしろ、適度に肩の力が抜けたくらいの方が、ポジティブなイメージで進めていくことができるのではないかと思う。

今までは、「多文化共生」を考えると、「どうしたら、色々なバックグラウンドを持つ人たちが共生できるのか」という、漠然とした考え方しかできなかった。しかし、今回のフィールドトリップを通じて、静岡の学生の方々と、一緒にサッカーをしたり、多文化共生のことだけでなく大学のことや趣味なども話したりして時間を共有する中で、それぞれ異なったバックグラウンドや事情を抱えているけれど、「この人と自分の両方にとって生活しやすい社会はどのような社会だろう」という考え方に変わった。これまで、どちらかというと、「研究対象」に近かった「多文化共生」だったが、自分に本当に近い、「顔が見える」多文化共生を考えるようになった。

多文化共生は難しい。しかし、一度、その難しい問題や理論を脇に置いて、自分自身で経験してみることで、多文化共生の難しくなくて身近な面を発見することができる。考えてみれば、当たり前のことかもしれないが、それが見えなくなるほど、今までの自分は難し

い「多文化共生」にとらわれていたのだと思うし、今回、このような機会をいただいていなければ、そのままの考え方しかできていなかったと思うと、本当に素晴らしい機会をいただいたと思う。この場を借りて、宮城さんを始め、今回関わって下さった静岡の学生の方々と、フィールドワークコーディネーターに感謝したい。

＜3 年　根本昌輝＞

今回のフィールドトリップで得られた一番の学びは、「多文化共生」という理論を実践と結びつけて考えられるようになったことである。

前期はよる教室にあまり参加できなかったということもあり、「多文化共生」を実践ベースで捉えるための機会が少なく、それが実際にどのように実践と結びついているのかといった現実味を感じられずに、文献で学んだ理論が孤立してしまっていた。しかし、三日間の宮城さんたちとの交流を通して、わずかながら多文化共生のリアルに触れ、今まで宙に浮いていた「多文化共生」という理論を少しは現実に引き寄せて考えられるようになったと思う。

たとえば、私が文献を通して学んだ「多文化共生」のイメージに「なだらかさ」というものがあった。私はこの「なだらかさ」というイメージに幾度となく助けられたように思う。ひとつ具体的な例を挙げれば、私は二日目のバスの移動の最中にゼミ生と宮城さんたちの関係がどのようになっているのか、ということを考えていた。私は宮城さんたちとゼミ生が別々にわかれて座っている状態に漠然と違和感を覚えたが、それをなかなか言語化することができなかった。その時にその関係を表す判断基準となったものが「なだらかさ」であった。「なだらかさ」という基準でその状態を測ったとき、そこにはゼミ生と宮城さんたち、という二項対立の構図が出来上がっていることに気がついた。そこで、本来であれば二日目の夜に行うはずであった宮城たちからのヒアリングを三日目の午前中に移し、二日目の夜は交流会の時間をできるだけ伸ばして、ゼミ生と宮城さんたちとの親交を深めることにした。

おそらく、「多文化共生」という理論を全く勉強せず、経験学習のみを重視していればこのような気づきをすることはできなかったと思うし、経験学習をしなければ「多文化共生」における「なだらかさ」がどういうことなのかということを深く理解することもできなかったと思う。

以前、鈴木健さんが「理論をそのまま実践に当てはめても使えないけど、理論は実践を裏付けて、ときに助けてくれる」ということを話してくださったが、まさにそれを実感した瞬間であった。

これからもゼミでは分厚く、難しい文献を読み続けることであるとは思うが、それらがどのように実践と結びつくのかということを以前よりも想像しやすくなったことで、それらの理論を学ぶ意義を感じられるようになるのではないかと思う。そして、後期はフィールドワークにもいっそう積極的に参加することで、多文化共生という概念をより深く理解していきたい。

＜３年　田中瞳子＞
正直なところ、私には「多文化共生」の定義はまだわかりません。
ただ、今回のフィールドトリップを通じて感じたことは、「多文化共生」というのは、外国人の多い場所に居れば自然と出来るものではなく、そこに住むマジョリティとマイノリティ、両者の努力があって初めて成り立つものなのではないか、ということです。
フィールドトリップでの街歩きや、宮城さんたちのお話を聞いて、「多文化共生」は、ブラジルの方が、ブラジルでの生活そのままを日本で出来るというわけでもなく、日本人の人が、日本人しか住んでいない場所での生活を出来るわけでもない状況なのかな、と思いました。
宮城さんたちのお話を聞いたり、最終日にはままつグローバルフェアの映像を見せて頂いたりした中で、宮城さんたちが日本で、浜松で暮らす中で、人の何倍もの努力をしてきたことを痛感しました。そしてそれは、もしかしたら彼女たちがブラジルに住んでいればしなくてもいい努力だったのかもしれません。
また、磐田団地でのゴミ捨て場や標識のポルトガル語表記や、多文化共生センターでの取り組みも、日本人しか住んでいない場所であったら行われていなかったことだと思います。
このように「多文化共生社会」というものは両者の努力なくしては実現しないのだろうな、ということを、当たり前のことかもしれませんが、今回の浜松で実際に自分の経験として感じることが出来ました。そして、「多文化共生社会」＝誰もが好き勝手に生きられる社会　ということでは決してないのだということもまた感じました。
今回の合宿は、感じたことを言語化することが難しく、上手く表現することが出来ませんが、大小様々な衝撃を多く受けた３日間でした。時間はかかるかもしれませんが、この３日間で自分の感じたこと、そして「多文化共生」とは何か、ということを今後も考えつつ言葉にしていきたいと思います。
ゼミ合宿がこんなに楽しくていいんだ！と思うほどあっという間の楽しい３日間でした。
本当にありがとうございました。

＜3 年　飯塚崇矩＞
　浜松の多文化共生に向けた町づくりに素直に驚いたとともに、「何人」であるとか、その人のアイデンティティて何、という会話がすごく印象に残っている。フィールドトリップとしてのコンテンツから得られたものはもちろんたくさんあるし、磐田の多文化共生センターなど興味深いものもたくさんあったが、毎日お世話をしてくれた宮城さんはじめ静岡のみなさんとの普段の会話でも気付かされる点も多くあった。
　一点目の浜松の町づくりについて。正直実際浜松に行くまで僕が静岡浜松に抱いていた印象というのはうなぎとお茶が強くあった。が、バスを降りた瞬間から多人種がまじりあい、看板も英語やポルトガル語が自然と共存していてかなり驚いた。個人的にはソーラーパネルや風力発電の多さにもすごく驚いたが、本旨とずれるので割愛する。磐田の団地に行った時には、本当にポルトガル語が多く、きちんと必要としている人のことを考えた町づくりをしていると感じた。

二点目の普段の会話について。特に印象的だったのはしゅらすこを食べている時のかおりとなおみの「自分が何人か」という質問に対する答えである。かおりはブラジル人であることに憧れを抱いているし、そうだと思っていると話し、なおみは日系ブラジル人とか二世とか言われるくらいならハーフと言われる方が良いと話し、２人とも小さい時から自分のアイデンティティについて考えてきたと話してくれた。人種、国籍、話す言葉、住んでいる場所、その環境にいる期間、等等の諸要素によって個々人の自らのアイデンティティに対する考え方は変わるし、また同時に周りがその人をどう捉えるかも異なる、ということを 3 日目のワークショップを通じても学んだ。頭では理解していたであろうことも、実際に当事者と話す機会があったことはこれ以上ない経験であった。結局知識として知っているだけじゃ自分がその当事者になったときには、自分が正義だと思っている道徳とか倫理観よりも根底にある本音が出がちだと考えている。すなわちこの経験を僕らみんなが気付けたのだとしたら、例えば「マイノリティも包摂する社会でないといけない！」という一言を放つ時にも、上辺だけを取り繕った偽善まみれの正義で終わらず、「自分の経験」もしくは身近に経験したこと、としてより重みの出る意見になると感じた。

＜3 年　杉本菜々子＞

これまで私は、ゼミの中で多文化共生の学びをしてきても、実際に多文化共生を肌で感じる経験がほとんどなかった。そのため今回のフィールドトリップでは、浜松市内を自分の足で街歩きさせて頂くことで、こちらでは味わうことのできない体験ができた。東京で出会う看板には英語の下に中国語や韓国語が目立つが、浜松市内の看板にはポルトガル語が表記されていたり、ブラジル等の食材がおかれたスーパーが存在したりと、街歩きによって共生している街を五感で感じることができた。

しかしなんと言っても、今回のフィールドトリップを通じて私の中で大きく印象に残ったことは、外国にルーツを持たれる方と、とても濃い時間を共に過ごせたことである。それも、同世代の方々と、サッカーをしたり、街歩きやブラジル料理屋さん、飲み会の中で会話をしたり交流をしたりすることができ、素晴らしい経験となった。外国にルーツを持つ方の講演をお聞きする、という形式よりも、こうして同じ大学生と 3 日間を共に過ごせたことで、「多文化」ということをかしこまって意識することなく、あくまで当たり前の友達として接することができ、より身近に多文化共生を感じることができたと思う。

また、最終日に皆さんの話を聞くことができたことも、とても充実した時間となった。それまでの 2 日間ですっかり打ち解けて仲良くなることができ、「友達」になれた皆さんが、ゼミ生からの質問に真摯に答えてくださり、その生の声にはとても考えさせられることが多かった。身近にロールモデルとなる人がいることや、理解してくれ支えてくれる人の存在がいかに大事かについて、彼らの口から聞くことほど説得力のあるものはなく、同世代の大学生がご両親・ご家族への思いや感謝を、恥ずかしがることなくまっすぐに語っており、私も見習いたいと思った。また、そこに双方の愛情を深く感じ、やはり家族間の支えはどの個人にも必要であるなと痛感した。そして、実際に学習サポートを受けてこられた側としての意見も聞くことができ、現在サポートをする側としてゼミの活動を行っている私たちとしても、こちらの都合で勝手をいってはいけないことや、勉強以外の話を

するなどして継続してよい関係作りを目指す努力が求められることも、改めて感じさせられた。

全体を通して、多文化共生、と言葉で口にすることは誰でもできるが、多文化共生の進んだ街に実際に足を運んでみたり、そしてまた外国にルーツを持つ人々と交流して友達になったりすることこそ、その距離が格段に近くなり、ゆるやかに混ざり合うための第一歩なのだと実感した。今回のような機会を設けるにあたって、準備を進め、協力をしてくださった全ての方に感謝の気持ちをお伝えしたい。

＜４年 佐野令奈＞

フィールドトリップの３日目に、前日の街歩きの班ごとに「多文化共生」を一言で表すとしたら何か？というワークショップをした時、私は「違和感がなくなること」と定義しました。その理由は、私が日本に暮らす「日本人」として、未だに国内の多文化状況や共に暮らす外国籍住民の存在に違和感を持っていたことに初めて気付いたからです。

塩原ゼミに入り学ぶ中で、他の日本人よりは多少なりとも、多文化化する日本の現状や多文化共生について理解しているつもりでした。この夏提出した卒業論文の中でも、多文化共生は、地方の政策や地域の人々の活動の中で、草の根レベルで促進されていることや、マジョリティ側の潜在的差別意識をなくすことの重要性について、熱弁しています。それにも関わらず、実際に浜松の街を歩き、目の前に存在するあらゆる多文化共生への取り組みを五感で感じ、心を揺さぶられました。それと同時に、未だその現実を心から受け入れられていない自分の存在にも気付きました。

・輸入食品店を訪れた時、鼻を突いた「外国の匂い」
・隣接するブラジルレストランで軽食を取るブラジル人の存在
・街に溢れるエスニックレストラン
・ポルトガル語やスペイン語の看板
・市庁舎で見た外国人サポートサービスの充実度
・ポルトガル語で書かれた日本の求人誌

このどれもに違和感を感じ、現実のものとして受け入れられていない自分自身に驚きました。正直、日本が日本ではないように思ったというのが率直な感想でした。これがニューヨークやトロントならば、何も違和感を感じなかったと思います。それはつまり、私が一人の「日本人」として、未だに日本を多民族国家として意識上受け入れられていないという証拠でした。日本人一人一人がこのことを理解し、共に生きる未来を築くことの難しさを痛感しました。それは卒業論文を書いているだけでは、決して気付くことが出来ない現実でした。

日本に暮らす一人一人の心の中の「違和感」がなくなること、それが多文化共生の一つの定義だと思いました。

〈３年 板橋瑛美〉

私は今までの海外生活の中では「外国人」という立ち位置であり、アジアの国々で暮らしていた頃は日本人であることを強く意識する機会はなかったが、アメリカで生活してい

た時は自分が「アジア」から来ている「外国人」であるということを日々意識させられていた。自分や同じ立場の人（私が住んでいた海外の国に同様に暮らしていた「外国人」）のことを考えることはあっても、日本で長期間生活をしている外国の方のことを深く考える機会は少なかった。今回の合宿では海外にルーツを持つ方々と直接お会いして一緒に話し合うことができたので、今までとは異なる新たな視点に気づくことができた。

最も印象的だったことは、最終日に行ったディスカッションで静岡の大学生やゼミ生から様々な意見が聞けたことである。周りの人の考え方を聞き、それに対する自分の考えを言葉にして伝えることで、今まで深く考えることのなかったぼんやりしたものを細かく噛み砕いて自分の中で納得することができた。考える過程で過去の経験や身近な人のケースについても、「こういう人はどう感じているのだろう？自分自身をどう捉えているのだろう？」と疑問をもつようになった。しかし、行き着く答えは、「他者である私が出せる答えではないので、その人が主張することでその人が納得していればそれでいいのだ」ということである。周りの人が考えている以上に本人は自分のアイデンティティーについての葛藤や悩みがあったはずであり、答えが簡単に出てくることではない。その悩んでいる家庭で本人が周りの意見を聞きたい場合はもちろん一緒に考えることがベストであるが、そうでない場合は個人の判断を尊重し、本人がそのときに持っている意見を受け入れたいと思う。

センシティブな話題でもある「アイデンティティー」のお話をシェアしていただけたことは私にとって非常に良い経験になった。ここで学んだことをゼミの中だけにとどめておくのではなく、より多くの人に発信していきたい。

<3 年 松坂くるみ>

今回のフィールドトリップで考えたのは、多文化共生の「生＝生きる」とは何かということだった。普段の勉強を通して共生という言葉を使っているとき私は、何か特別なことをしなくてはいけないようなイメージを勝手に抱いていた。しかし、実際にその土地で「生きる」というのはなにも大げさなことではなく、食事をしたり、ゴミを出したり……。といったようなごくごく当たり前のことの積み重ねなのではないかとこの数日間で感じた。それは、海外の食材輸入品店があることを教えてもらい、磐田の団地で見たゴミだしの標識がポルトガル語で書かれていることを知り、で初めて実感したことであった。特別なことをしようと肩ひじ張るのではなく、当たり前のことを当たり前にできるようにするためにどうしたらいいかを「共に考える」姿勢が求められているし、当事者ではないから分からないと思ってしまうことは、思考停止だと感じた。これは一見矛盾しているように思えるかもしれない。しかし、マジョリティを自認している側の人間が「これは当たり前にできる」と思っている生活の中のこまやかな部分にこそ、共生のヒントが隠されているのではないかと思う。フィールドトリップとは直接関係ないのだが、個人的にマイノリティ・マジョリティという言葉を使うこと自体があまり好きではないので、マジョリティを自認している側の人間というまわりくどい表記になってしまったことを注釈として加えたい。

また街歩きや懇親会を通じて、浜松の学生の皆さんとお話しをできたのも私にとってとても大きな意味をもった。特に田中君が「外国につながっているからこそ明るい未来が歩

めると思う」と話してくれたことが印象的だった。よる教室（ゼミ活動の一環で行っている外国につながる子供たちへの教育支援）の子供たちは、言語の壁に悩む子、学校でどうふるまったらいいのか戸惑っている子など様々で、自分のルーツに対して必ずしも良い感情を持っている子ばかりではない。もちろんいつも悩んでいるわけではないし、楽しく過ごしている様子を見ているのは嬉しいが、やはりどこかで不安を抱えていると感じる瞬間も多々ある。しかし、田中君のお話しを聞いたことで、浜松の学生の皆さんがよる教室の子供たちのロールモデルになってくれていることを実感し、私自身も明るい気持ちになれた。もし東京に遊びにくる機会があったら、ぜひよる教室の子供たちと色んな話をしてもらいたいと思った。

＜４年　水野上萌＞

フィールドトリップが終わって約１ヶ月が過ぎました。私事ですが、9 月の半ばに最後のミュージカル公演の本番を終えて、フェイスブックにその報告をしたら浜松の学生のみなさんからいいね！をいただきました。今でも、1 ヶ月前に浜松のみなさんとミュージカルの話をしたことをまざまざと覚えています。

3 日目にわたしたちと浜松の学生のみなさんで「多文化共生」のイメージについて共有し、多文化共生を一言で表すというワークを行いました。そのとき私たちの班では「差違ばかりをとりたてるのではなく、お互いに共有している部分を増やしていく」ことが大事であるという話がでました。異なるバックグラウンドをもつ人々との対話の際に、「お互いの違うところ＝差違を理解しあい、認める、受け入れる」ということがよく言われることだと思います。しかし、逆の発想でお互い違うところがあるのはわかった、むしろその中で共有できるところがあるとそこから発展させられることがあるのではないか、という議論がなされました。

わたしもこの 3 日間というフィールドトリップの中で思い当たるところがありました。みなさんに対して自己紹介をするときミュージカルの話をしたのですが、そのあとに浜松のみなさんが「わたしも英語劇を高校のときにやっていたの！」と話しかけてくださり、ミュージカルという「共通」するもので「共感」しあいました。好きなミュージカルのはなし、次の公演でどのようなことをするのか、など話が盛り上がりました。また、K-pop が好きという学生の方とも、お互いが同じアーティストが好きという「共有」をしました。また、1 日目にしたサッカーという「スポーツ」も、体を動かしている時間を「共有」して言語や文化の壁を越えて一気に私たちの距離を縮めたのではないかと思います。

相手の、自分とは違った部分を見つけることもとても新しく楽しいことではあります。しかし、やはり「共有」できるものがあるとそれだけで嬉しくなると思いました。それはミュージカルであれ音楽であれスポーツであれいろいろな形があると思います。もしかしたら意外なところに共通点があるかもしれません。そして、それは 3 日間という短い期間でもできるということがわかりました。そのような意識がひとりひとりの中にあると何かが違ってくるかもしれません。

今でも、フェイスブックという形を通して彼らとつながれていることが嬉しいです。まだまだ共有する部分を増やしていきたいです。

最後に、今回のフィールドトリップという試みがサイコー！でした。夏の、学生時代の、塩原ゼミの、（言葉にすると陳腐ですが）かけがえのない思い出になりました。フィールドトリップチーフのみなさん、塩原先生、浜松の学生のみなさん、磐田市多文化交流センターのみなさん、HICE のみなさん、全ての方に感謝申し上げます。

<3 年　鈴木脩大>

春休み頃のゼミ課題で読んだ文章の中で、浜松市が多文化共生都市としての取り組みを他に先駆けて行ってきたという記述を見てから、具体的にどのような暮らしがそこで営まれているのかと気になっていた。今回のフィールドトリップでは、文芸大のみなさんに街を案内していただいたり、交流会を行うことで、表層だけの理解ではなく、自分からその深部に入っていくことで得られる気付きも多いのだと認識した。

より自分の身近なところに目を向けると、私が住む横浜市にも、7 万人を超える外国人が居を構えている。私が通っていた小学校にもたくさんの「外国につながる子ども」がいたと記憶しているし、観光地として成立している中華街もあったり、オフィス街を歩いてもカタカナの氏名が書いてあるＩＤカードを首から提げたビジネスマンの姿を見ることが多い。それにもかかわらず、多文化共生が成立しているという実感は住んでいる人間としては薄い。雑感ではあるが、多文化共生都市としての浜松市に学べることがあるのではないかと思った。

最終日に行ったワークショップでは、事前に何も考えを用意していなかったにもかかわらず、多文化共生とは「絵の具のパレットのようなもの」というイメージが不意に口をついて出てきた。絵の具のパレットにおいては、隣り合う色同士が仕切られてはいるものの、その仕切りを超えて混ざり合うこともできる。そのような抽象的なイメージではあるが、今まで自分が漠然としか描くことができなかった多文化共生へのイメージが、３日間の活動を通して言語化される段階まで達し、前よりも格段に捉えやすくなったということもこのフィールドトリップにおける収穫ではないかと思う。

そのあとのワークショップで、「人が　なに人であるか」を判断する基準について考えたことも印象に残っている。道徳的・倫理的には本人がなに人で在りたいかという意思を尊重するのが理想的であると思うが、国家の秩序のためという名目で法により決定されてしまう（無論それだけではない）というのがなんとも言葉にしがたい事実であり、それを定めているのが私を含むマジョリティ側の責任であるということにも遣る瀬なさをおぼえてしまった。

最後に、何より、今回交流してくださった皆さんから学ばせていただいたものはとても大きかったと思う。自らのバックグラウンドに誇りを持ち、大変な時期に支えてもらった人々への感謝を忘れない姿勢に、よる教室に来ている子どもたちも彼ら、彼女らのような大人に育っていけたら、私たちの活動に本当の意義が生まれる時が来るのではないかと考えた。私たちのよる教室における今後の活動にも大きなヒント、そして励ましを得た気分になった。

<4 年　西村英恵>

多文化共生とは何なのか、浜松を訪れる前にはなかなかイメージすることは難しいことでした。実際に浜松の街を歩き、磐田団地に足をふみ入れて感じたことは、多文化共生とはとても身近なものであり、人々の生活の中にあるものだということです。ゴミ捨て場の看板や標識がポルトガル表記であったり、多文化交流センターから楽しそうに走って出てくる外国につながる子どもたちの姿から、そのことに気づかされている自分がいました。考えてみれば当たり前のことなのかもしれませんが、文献を通してだけではなかなかイメージできなかった多文化共生を肌で感じることができました。

宮城さん方と共に過ごした 3 日間は、本当に濃く、たくさんのことを学ばせていただきました。多くの学びの中でも私が強く感じたことは、多文化共生のすすんでいる浜松においても、外国につながる子どもたちが暮らしていくことは決して楽なことではないということです。これは、2 日目の街歩きや 3 日目の宮城さん方からのお話をうかがった際に、特に考えさせられました。今までの苦労や家族のサポートへの感謝をお話してくださる姿に、みなさんの「強さ」を感じました。今までにたくさんの困難や苦労を乗り越えて、誰よりも努力を積み重ねてきたからこそ伝わってくる「強さ」なのかもしれません。今の自分があるのは、親のサポートやキーパーソン、引っ越しの少なさと話す宮城さんの姿に、外国につながる人々が日本で暮らしていくということは、いかにその人それぞれの環境にゆだねられているかを感じました。最終日に見せていただいた宮城さん方のビデオの中で、「国へ帰れ、外国人だから無理、ここは日本語を学ぶ場ではない、などの言葉が雨となって自分たちに降り注ぎ、たくましく成長することができた」という言葉がとても印象に残っています。これらの辛い言葉を、宮城さん方が今はむしろ自分が成長することにつながったポジティブなものとして受け止めている姿を見て、もし私が同じ立場だったらこんなにも強くなれるだろうかと、ただただ感嘆してしまいました。雨ばかりが降っていたら、種は育つことはできないと思います。種を育てる土壌や太陽を日本の社会でもっと育んでいくためには何ができるのか考えていきたいです。

浜松の学生のみなさんを始め、塩原先生、フィールドコーディネーターの方々、すべての方に感謝の気持ちでいっぱいです！ありがとうございました。

〈3 年　大西菜穂〉

私の率直な彼女たちの印象から述べる。大人っぽくて、生き生きとしていて、何より浜松が大好き。まち歩きの際は、とても楽しそうに私たちを案内してくれた。そして歩いていたときに、浜松のまちにはなにか、自由な雰囲気を感じた。これまで私自身、「多文化共生」は少し理想を語りすぎているのではないかと文献を見ながら考えていた。しかし、浜松を見て少し共生に対する見方が変わったような気がする。彼女らは、自分の住んでいるまちに対して、主体的に関わろうとしているように見えた。これまでには彼女らを悩ます大変な苦労があったことをプレゼンテーションのビデオを見ても思ったが、そんなことは全く感じさせない彼女らの明るいふるまいだった。

最終日に、ゼミ生と彼女たちとで話し合った内容も印象に残っている。私自身は、“どうして高校卒業後にすぐに就職を考えず、大学進学を決意できたのか。そのモチベーショ

ンは何だったのか”という質問をした。答えは、“親や先生が助けてくれたし、兄弟や先輩が良いロールモデルになってくれたから”というものだった。また、“自分たちが受けた学習サポートに対してどのような印象を持っていたか”という質問に対しては、“自分たちとサポートをしてくれる人たちは同じ立場であるべき。だから、たとえば試験期間だからとか教える側の勝手な都合で来たり来なかったりするのは理解できない。”と言っていた。
私たちのよる教室での活動を思い返してみたとき、私たちは子どもたちの背中を押せる存在になれているかというとまだ自信がない。また、自分たちが思っている以上に、子どもたちは私たちのことをしっかり見ているのかもしれない、と彼女らの意見を聞いて思った。彼女らが話す様子を見て、学習サポートを受けたことは彼女らにとってとても貴重で素敵な経験であったように感じられ、よる教室の子どもたちにも同じ思いをさせてあげたいと強く思った。
浜松のまち全体からも、彼女ら自身からも多くを学んだ３日間であった。ありがとうございました。

＜４年　幸田杏子＞
今回のフィールドトリップでは、浜松のまち歩きや現地の学生の皆さんとの交流を通じて、普段のゼミの活動ではできない貴重な体験をすることができました。そのなかで気が付いたことは、私たちは今まで「多文化共生」を難しい言葉や概念でとらえようとしすぎていのではないかということです。街歩きのさいには、ビックカメラに数か国語の通訳の人がいることを教えてもらったり、各国の食品が並んだスーパーや様々な国のお店を紹介してもらったりしましたが、それらはすべてごく自然な光景で街になじんでいました。また、「多文化共生」を一言で表すと？というワークショップのなかで、浜松の学生の方々から出たのは「カラフル」や「シェアハウス」など、明るいイメージで、そして誰にとってもわかりやすい言葉でした。これらのことから、実際にある「多文化共生」とは、堅苦しいものではなくて、ほんとはもっと身近でごく自然なものであって、無理やりつくられるものではなく、社会に住むすべての人々が一緒になって主体的につくっていくものなのだと、自分の中でのイメージが変わりました。
また、三日間一緒に過ごし、お話をきいたり、はままつグローバルフェアの「若者企画」の映像を見せていただいたりして、同世代の人たちがこんなにもたくましく立派に生きているんだと驚きました。それぞれのお話から、学生のみなさん全員が、とても家族想いであること、周りへの感謝を忘れずに生活していること、人一倍努力してきたことを知り、映像では、心無い言葉を投げかけられたり、辛いことがあったりしても、それを雨に例えて、自分を強く成長させてくれたとし、同じ境遇の子を支えたいという想いで、自分にしかできない活動をしていきたいということを語っているのを見て、感銘を受けました。学習サポートについてのお話もあり、鶴見の活動での私たちの取り組み方や、かれらのために私たちができることは何なのかをもっと考えなければならないと感じました。
この３日間の経験や感じたことを今後のゼミでの活動にしっかり活かしていきたいと思います。最後に、今回のフィールドトリップに関わってくださったすべての方に感謝いたします。ありがとうございました。

＜４年　福澤美奈＞

ポルトガル語で書かれた看板や、ブラジル人ばかりが目に入ってくる町など、フィールドトリップで見たものや体験したこと全てが私にとってはとても新鮮でしたが、なにより強く印象に残っているのは、最終日のグループワークとディスカッションです。外国につながりを持つ宮城さんをはじめとした静岡の大学生のみなさん、それから当日センターのインターンシップ生として参加してくださった学生さんのお話は、どれも自分の心に刺さるものばかりでした。これまで自分が経験したことのない、様々な場面に立ち会ってきた方々だからこそ込められる想いが、一つ一つの言葉からひしひしと伝わってきました。

その中でも、「言語が自分の自信になっている」、「外国につながっているからこそできる仕事がある」という発言は非常に強く印象に残っています。自分のルーツをあんなにポジティブに力強く話す学生の姿を見たのは初めてで、ただただ感銘を受けました。

私が普段接している鶴見の教室の子どもたちは、自分のルーツをプラスに捉えている子ばかりではありません。それに、まだまだ大学へ進学する者も少なく、宮城さんたちのようなロールモデルとなる存在があまり見受けられないのが現状です。東京へ来たときにはぜひ鶴見の子どもたちにお話をしてほしいとお願いしたところ、「あ、いいねそれ。やりたい！」なんてお返事もいただくことができたので、実現できたら本当に嬉しいです。

「多文化共生」という、私たちのゼミではもう“お馴染みの”ものであったはずのこの言葉の印象が、今回浜松の学生のみなさんと時間を共にし言葉を交わす中で、少し変わったような気がします。移民第二世代の若者が活躍できるような社会は、正直なところ理想論なのではないかと疑ってしまうくらいに想像がつかなかったのですが、今回の旅でようやくイメージすることができました。センシティブな話題にも触れてくださり、たくさんの学びを提供してくださったみなさんに、心から感謝します。ありがとうございました。

＜4 年　巴健太郎＞

今回のフィールドトリップを通じて、私たちは今まで以上に多文化共生というものについて知る事が出来たと思います。これまで自分たちが見聞きしてきた「多文化共生」という言葉は、括弧のついたすこし仰々しいもののように感じてしまう事がありました。ですが団地での多言語の張り紙をみたり、団地の変遷等の話を聞いたり、最終日に改めて話を聞いたりしているなかで、多文化共生というものが決して仰々しいものではないのだ、と思いました。事実、最終日のセッションでも自分はどうしても難しい言葉で多文化共生という言葉を表現しようとしていましたが、宮城さん達の提案する「カラフル」「虹」などのことばを聞いていると、自分がそのように難しく構えてしまっているからこそ多文化共生という目標がうまく実現する事が出来ない場合もあるのではないかと思うのです。多文化共生というものを考えるときに難しい言葉にこだわり、結果独りよがりなものになってしまう事の方が、一人では達成する事の出来ない多文化共生というものをとらえる上で無意味な事かもしれません。むしろどこか歪んだり問題があったりしても、それを互いに指

摘し合ったり議論していくなかで、一人だけのものではない、みんなにとっての多文化共生が生まれるかもしれません。

今回のフィールドトリップで一番印象的だったのは、最終日のトークセッションとその後に見せていただいた宮城さん方のスピーチのビデオでした。自分たちに向けられた言葉を「雨」としてとらえ、それがあったからこそ自分たちが成長できたというのは、これまで自分では決して思いつかなかった発想である事と同時に、その言葉の力強さとその背後にある意志の強さに裏打ちされてのものだと思います。また、そういった背景にはロールモデルとなる人物や、周りの人の助けがあってこそだったという話もありましたが、そのときに私は今関わっている鶴見の高校生達の事を思い返し、自分たちがそういった人物になれているのか、そもそも自分たちと彼ら彼女らは互いの事をどう思っているのかという当たり前にお互い“分かっている”と思ってしまっていた事の重要さに気付かされました。

最後になりますが、今回のフィールドトリップにあたり企画立案をしてくださったコーディネーターの方々や、塩原先生、文芸大の皆様、磐田市多文化交流センターの方々、貴重な体験を本当にありがとうございました。

〈3 年 岩田陽介〉

今回のフィールドトリップで、浜松の街で過ごしたことで「多文化共生」する地域の雰囲気を身をもって体感できたことは貴重な経験でした。今までのゼミでの学習の中で「多文化共生」について学び、多文化共生とは何かを自分の言葉で言語化することが難しいと感じていたが、この３日間を過ごして「多文化共生」自体を難しく堅苦しく考えすぎていたのではないかということに気づかされました。最終日でのワークで「多文化共生を一言で表すと何か」という問いに対しても多種多様な表現の仕方があり、明るく緩い表現で表されていたことが印象的で、私自身もポジティブなイメージへと変わりました。そのようなイメージの変化は実際に当事者と関わり、彼らが日常とする環境に身を置き、彼らの立場に立つことで私たちにとっての「非日常」を日常と感じられたからこそ起こったことだと思います。また、宮城さんたちのプレゼンや外国にルーツを持つ方の映像を見て、彼らが自分のアイデンティティに向き合い、自分のルーツに自信を持ち生き生きとしている様子にとても胸をうたれました。

そして、街歩きで磐田の団地を訪れた際に、ゴミ捨て場の看板がポルトガル語で表記されているのを見て「共生」している街だということを認識しました。外国人との共生が進む地域で両者がもめる例としてやはりゴミの分別の問題があります。その点で磐田の団地はきちんと相手のことを考えお互いが気持よく暮しあえるような工夫がなされていると感じました。これはお互いが理解しあえているからこそなされることであり、まさに「共生」を感じられた出来事でした。この３日間を宮城さんら「外国につながる子」のロールモデルとなる存在と過ごし、よる教室の生徒たちに彼らのようになって欲しいと強く感じたとともに、私たちも一種の彼らのロールモデルとなるようにこれからよりサポートしていきたいと思います。

以上の経験は「多文化共生」をテーマにして取り組み、日々学んでいる私たちだからこそ得られた貴重な経験でした。このフィールドトリップで得られた知見や経験をうちに留め

るのではなく、日本の地域の現状をより知ってもらえるように「多文化共生」の現状を知らない、学んでいない人々に自発的に発信していくことにこれから努めていきたいと思います。最後に、この企画の成功が成功に終わることができたのは宮城さんら浜松の学生さんの協力があってのことでした。彼らにはこの場を借りてお礼を申し上げたい。ありがとうございました。

4 年松永博之

フィールドトリップにおいて特に印象に残ったことを、以下に大きく２つにまとめる。

まず一つ目はフィールドトリップを通じて私自身が感じた「楽さ」である。私は多文化共生という言葉を考える時、いつもちょっとした緊張感を覚えていた。自分とは違う文化の人と、共に生きるとはどういうことだろう。なんとなく、「自分とは違う」という意識が先行してしまう。しかし実際に浜松を訪れ、街を歩いて雰囲気を感じ、そして静岡文化芸術大学の皆さんと一緒に時間を過ごしてお話をしているうちに、非常にリラックスした、良い意味での「楽さ」を感じていることに気付いた。セルヴィツーという輸入食品を扱うスーパーやエスニックレストラン、ブラジル銀行、そして浜松の街並みと住民の方々の様子を眺めながら、「浜松の街面白い！」「え、これ東京にないの！？」とお互いの持つイメージのギャップを話したりしている時、自分は面白いほどリラックスしていて、本当に楽しかったのである。最終日のワークショップの際に他のゼミ生も言っていたが、多文化共生という言葉を難しく捉えるだけでは勿体ないと感じた。もちろん、勉強を通じて多文化共生の理論や実際に存在する課題をしっかり考えることは重要である。しかし、多文化共生を実践する上では良い意味で肩の力を抜き、楽しんで人やものに触れ合うということも大切だと改めて感じた。

二つ目は、静岡文化芸術大学の学生さんの、日本での生活や勉強に対するポジティブな姿勢である。ある学生さんは「自分のバックグラウンドを将来役立てたい。そのためにいま勉強を頑張っている。」とおっしゃっていた。浜松に向かう前、多文化共生というと言語的な支援など、外国人を守るための一方的な支援のイメージばかりをなんとなく持ってしまっていた。しかし、自分のバックグラウンドを活かすための具体的なイメージをして、主体的に日本社会に参加しようとしている学生さんの様子を見て、本当の多文化共生のためには双方向の努力が重要だということに気付かされた。同時に、そのようなポジティブな姿勢を支えるロールモデルの存在の重要性を感じ、実際に鶴見・川崎で高校生や中学生と触れ合っている自分たちの果たせる役割、そして責任の大きさというものを自覚する貴重な機会にもなった。

最後に、今回のフィールドトリップという新しい取り組みは本当に楽しく、学びの多い最高の体験になりました。関ってくださった皆様、本当にありがとうございました。

4 年佐藤公耶

私はフィールドトリップを通して、文化を行き来する中間の文化というものを感じることができた。浜松市、磐田市には日本とブラジルが混ざり合った領域が多く存在していたことに、18 年住んできたにも関わらず初めて知ることができた。自分にとってブラジル

人、外国人という存在は決して遠い存在ではなかったと思う。なぜなら小学校のクラスにもブラジル人はいたこと、標識などでも外国語を見ることが多かったことなど実体験として外国人、外国文化と触れ合っていたからだ。しかし、勝手に身近に感じていた外国人について、自分がいかに無知であったか知った合宿であった。彼らが何を食べて、どこで暮らしているか、私は知らなかった。また母校の近所の高校に外国にルーツを持つ生徒がいることも知らなかった。結局自分の周りにあるものしか見ていなかった、見るだけで考えていなかったのだろう。その見えていなかったものを見ることができた、考えていなかったことを考えることができた合宿だったと思う。

宮城さんやたくもん君にはとても感謝しています。ありがとうございました。

3 年　永田さくや

もう一か月も過ぎてしまったが、今回のフィールドトリップは私にとってとても印象に残る、貴重な経験となった。

正直フィールドトリップに参加する以前は、浜松市に対して何も知らなかった。しかし町を散策してみると、そこは本当に興味深い、素敵な町だった。電気屋さんには 5 か国もの通訳がいて、スーパーには多国籍な食品がずらりと並んでいた。私にとってこれらはすべて新鮮であったが、私たちを案内してくれた鈴木さんは、これらはすべて浜松では普通なことで、みんな慣れていると話してくれた。実際にこのように町を歩いたり、人と会ったりすることで、今まで文献をもとに学んできた「多文化共生」が自分の中で少しだけわかりやすくなった。浜松では「どこにルーツにあるの？」という質問を気軽に聞くことができるらしいが、これは文化の違いをお互い認め合っているからこそできることであろう。「多文化共生」とは、最終日のディスカッションでも話し合ったように、みなが主体的に混ざり合い、違いを直すことが強制されないパレットのようなものだと感じた。

先日この合宿についての話を知人にしたところ、三重県の中の外国にルーツのある子供の学習支援についてのワークショップを行ったことのある三重大学人文学部准教授の江成幸さんをご紹介していただくことになった。三重県は、家族と一緒に来日する子ども、また日本で生まれ育った外国にルーツのある子どもが年々増加していて、県内各地で様々な支援が行われているらしい。例えば、三重県ではポルトガル語での自動車運転免許学科試験を実施しているようだ。このようにさらに日本各地の多文化が共生する町を実際に訪れ、実際にお話を聞くことで「多文化共生」についてさらに学び、自分が参加する夜教室についてもさらに考えたいと思う。最後に、このフィールドトリップに関わっていただいたすべての方に感謝したい。本当にありがとうございました。

4 年 小川未来

フィールド・トリップが実施できて、ほんとうによかったとおもう。

大変申しわけないことに、今年はゼミに時間や労力をさけていない。その後ろめたさを棚にあげて語ることを、この文章を読んでいる関係者諸氏に許してもらいたい。割けていな

いのは、サボっているわけではなく、ほんとうに忙しいからだ。(たぶん、塩原先生の1/2くらい)

火曜日が来るたびに、このゼミでなにを学んでいるのだろうと考える。そういうと殊勝にきこえるかもしれない。しかしそこにあるのは、過密スケジュールの合間を縫って、後ろめたいおもいをして、なぜゼミに参加しているのかという問いである。さらにいえば、なぜ時間もお金もかけて浜松くんだりまでフィールド・トリップに参加するのか、という今回の自問はもっと強烈だった(とっくに単位は取り切っているにも関わらず)。

そのひとまずの結論が、
冒頭の「フィールド・トリップ、実施できてよかったな。塩原ゼミ。」である。

昨年の合宿にはかなり違和感があった。このゼミで学んでいることを表面だけでもなんとか解きほぐしてみると、(会話以外の表現、振るまいやおもいやりなどを含めた広義な意味での)「コミュニケーション」とかそれに伴った「場づくり」あたりが大きな要素になるとおもう。しかし昨年はお決まりの「合宿フォーマット」に、いつもの「塩原ゼミ」が乗っかっただけだった。

(昨年の合宿係やその他関係者を批判する意図はいっさいない。強いていえば「フォーマット」批判だとおもってほしい)

今年はちがっていた。「塩原ゼミらしさ」という言葉を安易に用いることの恥ずかしさを知りながらあえて言わせてもらうと、「塩ゼミらしかった」。改めて気づいたのは、「学生がじぶんたちで決める」ということの価値だった。先生が決めたカリキュラムや、所定のフォーマットに沿うのではない。そこにいる人のために、その場のために、なにがよいのかを学生が考える。終わっても正解だったかわからないからもやもやするけれど、その模索に意味がある、らしい(やっと分かってきた)。あとは終わりに先生が~~長々と講釈をたれて~~ありがたい理論や意義を教えてくれれば、それでいい。

着地も正しさも見えないことを、未熟なぼくらがあつまってやる。いまささやかな社畜ライフのなかで、そのめんどくさい機会の貴重さにようやく気づいてきた。どうやら後期も後ろめたいおもいをしながら、平身低頭、火曜日だけは三田キャンパスに行かないといけないようだ。がんばります。

塩原ゼミという稀有なめんどくさい「居場所」と、その価値を再確認させてくれたリスキーで手間のかかるフィールド・トリップに、感謝。来年もゼッタイやったほうがいいよ。

＜4年　佐川菜津美＞
　フィールドトリップを経て思うことは、二つある。

一つは、多文化共生に対する認識だ。最終日のワークショップで「あなたの思う『多文化共生』を一言で表すと？」というお題があった。各班の出した案は、～カフェオレ・共有するものを創っていく・なだらかさ・パレット～と、それぞれ表現の仕方はユニークだけれど、すとんと心に落ちるなぁと感じた。しかし、終わってから文芸大の皆さんがどんな意見を出していたかゼミ生に聞いたところ、かなりの人が「カラフル」と答えていたと知った。実際に、わたしの班で一緒だった子も「カラフル」と答えていた。一方でゼミ生は、「当たり前」「相互理解」「特別ではなく当然」と、どことなく難しい言葉を使って表現していた。これはゼミ生が間違っているとか難しく考えすぎだとか、そういうことを言いたいのではない。もちろんその通りだし、日々のゼミでの学びの賜物だと思うのだが、浜松の皆さんの意見を聞いていると、多文化共生が実現されるフィールドというのは、実はとてもシンプルなのかもしれないと思った。HICE の松岡さんがおっしゃっていたように、多文化共生とは外国人との共生に限定されるものではなく、「多様性」をもつ人々の共生のことだ。ただ、そこに行きつくまでの現状には様々な障壁がある。一筋縄ではいかない難しさを学んでいる私たちだからこそ、思い浮かべる多文化共生像が上記のようになったのだと思う。だけれど、すでに浜松という町で多文化共生を体現している彼らにとっては、すごくシンプルなことなのかもしれない、と思った。

二つ目は、浜松の街歩きをしてみて、当たり前のことを「特別」に思ってしまったなぁということだ。文芸大の皆さんに案内していただいて街歩きをしてみると、街中のいろいろなところでポルトガル語や韓国語などの多言語対応標識・商店・公共施設を見かけた。それらはすごく新鮮に思えて、私の住んでいる東京の街とは違った雰囲気に感動しながら、多文化共生アイコンを見つけるたびに「あ、見つけた！」「おお～」と興奮していいた。もちろん、そういった浜松の魅力を見つけることが街歩きのテーマだったと思うし、浜松の皆さんもそうした部分を積極的に紹介してくれていたと思う。ただ、こういう自分たちの反応は、毎日の生活圏に存在しない特殊物を発見して、その差異・物珍しさに驚いているような感じだったなと思えてくるのだ。東京と浜松はその土地と構成員が違うのだから、違っていて当然だし、人間誰しも自分のテリトリーとは性質を異にする事物に出会うと、その差異を際立って認識して当然だと思う。だから私たちの反応も自然現象といえばその通りだ。しかし、「発見した！」とはしゃいでしまった自分たちが、うまく言えないけれど、なんとなく悲しいなと思った。頭の中ではあるべき姿・当然のことだとわかっていても、やっぱり実際に自分たちの日常生活で当然には実現されていないんだ、と思った。私たちの反応は、彼らの目にどう映ったのだろうか。

つらつらと反省文のようになってしまったが、決してネガティブな主張をしたいわけではない。たくさん学びがあって、たくさん考えたことがある中での、自省の一部だ。フィールドトリップがわたしの価値観にもたらした影響は計り知れない。（終）

３．フィールドトリップ・コーディネータによる報告

フィールドトリップ・コーディネータ
根本昌輝　仁保麗　岩田陽介

3－1. 準備段階のふりかえり

3.1.1 企画

【良かった点】

春学期を通して行った文献輪読の授業を、自らが体験する形、すなわち実践的な形で学びたい、という意欲と、火木土の FW で得たものをアウトプットできる場所はないかという気持ちから、多文化共生を体験できる地域はないかと調べたところ選択肢に上がった 3 ヶ所の内の 1 つである静岡県浜松市を選択した。

バスという交通手段の選択は成功であったと考えられる。行き帰りの往復だけでなく、浜松駅周辺の移動が多くあったからである。次回以降の合宿の際にも、人数が多く、各地を回りたい際に、バスという手段はとても便利である為、活かしていけたらと思う。

【反省すべき点】

宿代、バス代など、費用が少し多くかかってしまったこと（一日目からきた人は約 30,000 円）。普段のゼミ合宿と比べても高かったのではないかと思う。次回以降は、より安く実施できるよう工夫をする必要があると思う。

3.1.2　宿、バスの予約

【良かった点】

宿の方は、予約の際に人数確定が不要だったため、すぐに予約を取ることができた。

【反省すべき点】

夏休みならではの問題としては、企業インターンや部活など、各自行動が多様化していて、なかなか日程、人数の確定が出来なかった。ある程度の参加率が見込めた時点で確定し、計画を進めるという選択肢もあったのではないかという反省点が挙げられる。この問題により、バスの予約が遅れてしまった。

3.1.3　バス代の支払い

【反省すべき点】

2.6 FT 係の連携においても述べる通り、連携が上手くいかなかったことにより、支払い期日など最低限のことも共有できていなかった点は、非常に大きな反省点である。その他にも、全員が個別に振り込んでしまったことで、生協さんにとっての大きな負担となってしまったことに関しては、FT 専用口座を設け、それを有効活用すべきであった。

3.1.4　宮城さんとの連絡

【良かった点】

初めの宮城さんとの個人的な連絡は、仁保が全面的に行った。お互い、違和感や障壁なく合宿に臨めるようにするためにも、まずは親睦を深めることに重点を置き、お互いを知ることができるよう努めた。自分の海外生活、多文化を切り口に、自己紹介を行ったことで、宮城さんが親近感を持ってくれたように感じた。また、合宿がより円滑に進むよう、予めゼミ員に宮城さんを知ってもらうための手段を考えていたところ、宮城さんが日頃取り組んでいる活動内容が書かれた記事や動画を送ってくださったので、それらをゼミの Line のグループで共有した。きっかけを提供できたのではないかと振り返る。

3.1.5　各日程のコンテンツ決め

FT 係の合宿テーマとして挙げていた、“多文化共生の身近な体験”と“普段の授業で出来ないこと”を元に、計画を立てていった。また、多文化共生の地域に赴くということで、その環境を存分に活かすことも重視した。その中で生まれたのが、

・サッカー―ブラジルの国民スポーツを通した交流
・シュラスコ料理―食事から多文化共生を体験する
・街歩き―視覚と聴覚からよりリアルな多文化共生体験
・ディスカッション―いつもとは違った視点の加わる意見交換

これらのコンテンツである。

3.1.6　FT 係の連携

【反省すべき点】

一番の反省点として挙げられるのは、FT 係間での情報の共有や定期的な連絡の取り合いが出来ていなかったことである。お互い忙しいからという理由により、役割分担をしたことが裏目に出てしまったと考えられる。また、携帯端末による簡易的な連絡より定期的な対面ミーティングやお互い忙しいなりの自覚を持つ必要性を大いに感じた。

3－2. 当日のふりかえり

3.2.1　１日目

〇雨天時の判断

【良かった点】

現地の人との連絡をこまめに取り、天候を確かめた上で決行に踏み切ることができたこと。

【反省すべき点】

雨天時のコンテンツを十分に考えられていなかった。今回は運良く晴れたから良かったものの、次回以降は雨天時の想定をして備えておくべきである。

〇宮城さんたちとの合流、見送り

【良かった点】

はじめに円になって自己紹介したことで、少し緊張感がほぐれたのではないかと思う。

また、見送りの際にも、ゼミ生と宮城さんたちとの交流が見られ、良い状態で一日を終えることができたのではないかと思う。
【反省すべき点】
２点ある。１点目は、宮城さんたちの交通手段を把握しきれておらず、バスが数時間に一本しか通っていないため、かなり早い時間にグラウンド付近まで到着させてしまったこと。14:00～15:00 付近で、ちょうどバスが通っている時間を調べてから集合時間を決めるべきであったと思う。２点目は、宮城さんたちをどこまで送るのかという想定ができていなかったこと。バス亭の場所を把握しておらず、思ったよりも遠かったため、私たちのバスに乗って送ることになったが、事前にそれを伝えていなかったため少し混乱させてしまった。以後、相手方の送迎方法まで想定しなくてはならないと思う。

〇サッカーの内容
【良かった点】
全員の名前を呼び合うウォーミングアップや、全員で楽しめるコンテンツを実施できたことはよかったのではないかと思う。また、試合の時間を短くして、こまめに休憩を入れるといったメリハリをつけることができたこともよかったと思う。
【反省すべき点】
サッカーの時間が少し長い、試合の回数が多かったことで、後半は少し疲れてだるそうにする人が見え始めたことは反省すべき点であると思う。チームを一旦ばらばらにして試合をしたい人だけで編成し直したり、そもそもの開始時間を遅くする、もしくは終了時間を早めるなどの工夫が必要になると思う。

3.2.2　２日目

〇朝の集合、当日の流れとコンセプトの説明
【良かった点】
この時点で当日の流れの説明と共に街歩きでの班分けを予め決めておいたために街歩きの開始を迅速に行うことができたと思う。
【反省すべき点】
当日の流れやコンセプトをより詳しくゼミ生と共有するために資料を作成し配るなどの配慮が必要であった。しかし、目的地などの詳細を却って伝えないことでより街歩きを楽しむことができ良かったのではないかという見方もある。

〇宮城さんたちとの合流
【良かった点】
まず、私たちが前日までに宮城さんと密に連絡を取り、集合場所と集合時間を明確にできていたことで、迅速に合流することが出来た。また、街歩きの際に負担にならないように、宮城さんたちの宿泊荷物をバスに預けるという配慮もできていた。
【反省すべき点】
バスに宮城さんたちの荷物を預けた後、グループ分けを行う場所への移動の際に、手際が悪く移動の開始が遅れてしまい、宮城さんたちを戸惑わせてしまった。

○街歩きの内容
【良かった点】
浜松の街を熟知している宮城さんたちに街歩きの中身を企画して頂いたおかげで、宮城さんたちに街を案内されるだけではなく、街歩きの中で多文化共生に関連するキーワードを探し出すという作業があったことにより、ゼミ生が主体的に浜松の街を知ろうとする姿勢になれた事は良かったと思う。全グループが集合し、その日のうちに振り返りを行い、グループ間の共有ができたこと。
【反省すべき点】
街歩きの詳細を知った上で、こちらのコンセプトとのずれがないかやグループによって内容に差が出てしまっていないかなど、こちらから意見出しができる機会をより設けていれば更に充実した内容にすることが出来ていたかもしれない。
最後、大学に全グループが集合し、宮城さんたちが司会となりグループ間の共有が行われたが、その際に彼らと共に FT 係も共有の手伝いができていれば、よりゼミ生からの声を聞くことができ、まとまりのある振り返りができたのではないかと思う。
ビデオの撮影に関しては、どのように撮影を行うか、撮影すべき場所・ポイントを予め撮影者間で共有しておくことが必要であった。
ゼミ生への事前のお知らせの段階で交通費が千円以内だと伝えたがグループよっては千円を越えてしまったため、予めタクシー代などを含め金額を明確にしておくべきであった。

○レストランでの交流
【良かった点】
街歩きを通して多文化共生を体感したのちに、さらに本場のブラジル料理を宮城さんたちと共に堪能し、食を通じた交流から多文化共生を感じることが出来た時間となった。
【反省すべき点】
席決めの際にゼミ生同士が固まって座ってしまい、宮城さんらとゼミ生が分かれてしまった。これでは合宿の趣旨に反する行動であり、ゼミ生には主体的に彼らと交流する行動に出て欲しかったが、こちらの配慮が足りなかった点は反省すべき点である。

○宮城さんたちからのヒアリング
【良かった点】
三日目の午前により深い話を聞く上で、全員が揃っている場で宮城さんたち一人一人の境遇を知り、全体で共有することができたこと。
【反省すべき点】
宮城さんらを含めた全体の自己紹介が終わった後に、ゼミ生から宮城さんたちに簡単な質問をする時間を設けたほうが三日目のコンテンツを行う上でより彼らが全体に予め共有しておきたいことを話すことができたのではないかと思う。

○宮城さんたちとの交流会

【良かった点】
宮城さんたちからのヒアリングを聞き、更に彼らの事をより深く知りたいと感じたところで、彼らと緩い雰囲気の中で交流する場として設けた事は三日目のコンテンツを行う上で良い機会になったのではないか。
【反省すべき点】
まず、交流会全体を振り返ると、「宮城さんたちとの」交流会というよりもゼミ生同士の交流がメインとなってしまっていた。初めの場を作る段階でゼミ生と宮城さんらが交流しやすいような配慮が必要であった。しかし、それは意図的なことではなく自然と交流が行いやすいように配慮することである。会場の真ん中でゼミ生だけで盛り上がる場が出来てしまったことで、会場全体の雰囲気があまり良くなかった事も反省すべき点である。

3.2.3　３日目

〇バスの席順

【反省すべき点】
ゼミ生と宮城さんたちで二つに分かれてしまったこと。宿からバスに乗るまでのあいだにもっとコミュニケーションを取り、自然な流れでバスに乗ってゼミ生と宮城さんたちが交ざるというのが理想であったが、会議室に集合した時点ですでに二つに分かれていたのが良くなかった。全体を通して言えることであるが、フィールドトリップが始まる事前に、レストランやバスの席順などは意識的に交ざるように伝えておくべきであったと思う。

〇多文化共生センターでの宮城さんたちからのヒアリング

【良かった点】
普段は聞くことができないような生々しい体験を直に聞くことができたこと。それぞれが多くの学びを得ることができたのではないかと思う。
【反省すべき点】
話してもらう内容についてきちんと伝わっていなかったこと。どのようなことを話して欲しいのかを明確に伝え、事前に考えてきてもらった方がもっと有意義な時間になったかもしれない。また、事前に聞きたいことなどをゼミ生から募集することでもっと全員の学びを深めることができたのではないかと思う。

〇ゼミ生、宮城さんたちを交えたディスカッション

【良かった点】
ひとつの抽象的なテーマに対して、全員がフラットに意見を出すことができたことは良かったと思う。また各班それぞれがまったく違う答えを出していたもの非常に面白かった。同時に、多文化共生とはなにかという問いに対しての理解が深まったのではないかと思う。
【反省すべき点】
時間が少し押してしまったこと。予定より 10 分長くかかってしまった。ヒアリング

も含めて、時間管理はもうすこし丁寧に行いたい。

〇松岡さんの講演

【良かった点】

二日間の経験学習を経て、最後に少しマクロな視点でそれらを眺めることで、三日間の締めとしてふさわしい時間になったのではないかと思う。講演後にゼミ生から松岡さんへの質問が多く出ていたのも良かったと思う。

【反省すべき点】

最後に二時間講演というのは、ゼミ生にとって少しスケジュール的にきつかったのではないかと思う。講演の中盤には、多くのゼミ生の疲れが見えた。講演の時間をもうすこし短くするか、もうすこしワークを増やしてもらうなどの工夫が必要であると思う。

また、予定時間よりも 20 分ほど長引いてしまい、バスの運転手に迷惑をかけてしまった。今後は、終了時間の説明はより丁寧に行い、時間通り終わらせてもらうことが必要だと思う。